

3 「家庭教育支援活動」部会

◆第1回部会

期 日：平成24年6月26日（火）

会 場：大津合同庁舎 5D会議室

出席者：千原委員（部会長）、高木委員、谷口委員、宮嶋委員、山本委員、吉田委員

事務局：生涯学習課（3名）

- 1 開会
 - ・生涯学習課参事 挨拶
- 2 自己紹介
- 3 今年度の補助事業の概要について、昨年度の部会の課題について（担当より）
 - 部会の位置づけの確認
 - ・事業の目的及び事業内容についての説明
 - ・「家庭教育」についての確認
 - 家庭教育支援関連法令（教育基本法10条、社会教育法5条）
 - 文科省通知（都道府県の役割、家庭教育支援と子育て支援）
 - 県内家庭教育支援活動についての説明
 - ・県内家庭教育支援実施状況について
 - ・昨年度の部会の意見について
 - （持続可能な取組、福祉部局・地域との連携、企業との連携、コーディネーターの養成）
- 4 部会協議 「地域の家庭教育支援の取組を活性化させるための仕組みづくり」について
- 5 連絡事項
 - ・日程等の諸連絡
- 6 閉会



◆第2回部会（現地視察研修）

期 日：平成24年11月6日（火）

会 場：近江八幡市立老蘇小学校

出席者：千原委員（部会長）、高木委員、谷口委員、山本委員、吉田委員

近江八幡市家庭教育支援コーディネーター等（12名）

事務局：生涯学習課（3名）

- 1 開会
 - ・生涯学習課参事 挨拶
- 2 現地視察研修
 - (1) 近江八幡市における家庭教育支援活動について（近江八幡市教育委員会参事）
 - ・近江八幡市における家庭教育の状況、子どもの様子
 - ・学校支援地域本部事業と家庭教育支援の連携状況
 - (2) 老蘇小学校の家庭教育支援の取組報告（老蘇小学校家庭教育支援コーディネーター）
 - (3) 近江八幡市家庭教育支援コーディネーターとの意見交流
 - (4) 老蘇小学校保護者研修会（講演・座談会）見学
- 3 部会協議 「地域に根ざした家庭教育支援のあり方」について
- 4 連絡事項
- 5 閉会



◆第3回部会

期 日：平成25年1月11日（金）

会 場：県庁北新館5B会議室

出席者：千原委員（部会長）、高木委員、谷口委員、宮嶋委員、山本委員

事務局：生涯学習課（3名）



- 1 開会
 - ・部会長 挨拶
- 2 今年度の事業経過および研修内容について（報告）
 - ・各市町における事業概要について
 - ・家庭教育支援に関する研修について
 - ・部会意見集約
- 3 部会協議 報告「地域に根ざした家庭教育支援のあり方」について
 - ・報告文章の検討
 - ・自治体の役割について
- 4 学校・家庭・地域の連携について
 - ・家庭教育支援活動と他の取組との連携について
- 5 連絡事項
 - ・実践事例集編集構想について
- 6 閉会

第1回～第3回「家庭教育支援活動」部会 意見の概要

○【事業全般について】

- ・行政と学校、地域の連携について、どんな形でもよいので、そのモデルを作っていく必要がある。
- ・家庭によっては、福祉の支援が必要な場合もあれば、ちょっと話を聞くだけで、次にチャレンジしていく人もいる。ネットワークの中で、親が元気になり、何でも話ができるようになれば、学校も一気に変わる。
- ・子どもが病気になったとき、隣のおばさんが子どもを見てあげる関係をつくることも家庭教育支援である。システムとして当たり前の地域をどう作っていくか、その風土をいかに3つの事業を融合させながらつくっていくかが大事である。
- ・学習の機会の提供が県内の大半であるが、昔の家庭教育学級の発想であるなら、行政主体でやっているだけでは、事業が終わるとなくなってしまう。ポイントは支援チームがどうなっていくかである。
- ・研修等に参加しにくい、しんどい思いを持っている保護者が参加できる工夫が必要である。
- ・無理をするのではなく、頑張るけれども、身の丈にあったところで、つなぎ合わせてつくられたしくみが必要である。
- ・御神輿方式と言われるが、重たい御神輿も一人でなく、10人、20人いれば担げるというように、しんどくなったら別の人に頼むというような形でいけばよい。ずっと頑張ってくれる人も大事であるし、御神輿を担ぐ人を一人でも多く増やしていくということも大事である。
- ・本補助事業も新たな枠組みとなって2年目となった。県内の家庭教育支援の基盤を形成し、持続可能な安定した体制の確立が重要な課題となっている。とりわけ、各地域で行われている様々な取組から、地域に根ざした効果的な家庭教育支援の事例に学んでいくことが重要である。
- ・難しいことをいっぱい聞いてうなづくことよりも、何かを意図的に仕組むことで、コミュニケーションを促進させる取組も家庭支援の中で考えてもよいのではないか。
- ・講演会も一つのやり方であるが、料理をしたり、芋掘りをする等、何か一緒にできることもあるのではないか。
- ・子どもが通っている学校において、保護者に相談に来てもらうのは難しいのではないか。
- ・さまざまな市町でいろんな取組をしており、講演会もいろいろとそこに来られない人もお

り、セイフティゾーンをつくっていくことも必要である。家庭教育支援コーディネーターだけでなく、NPOもあるし、福祉、大学ともコーディネートし学生も含めて行うのも、一つではないか。

- ・地域コミュニティにある様々な社会関係資本（ソーシャルキャピタル）を整備していくことが重要である。
- ・近江八幡市では、学校支援地域本部事業に取り組んでいる10小学校で家庭教育支援コーディネーターを配置し、学校・家庭・地域をコーディネートする役割を担っている。学校や地域での家庭教育の課題やその把握に努め、学校やPTAと連携しながら、家庭教育支援にも取り組んでいる。家庭教育支援は学校支援になっている。
- ・各市町の独自の組織、団体で考え、いろんな取組があって良い。

○【保護者について】

- ・子どもの課題の背景には、保護者や家庭の課題が見られる。子どもと十分に接することができない家庭や、経済的にも精神的にも不安定な家庭もある。
- ・保護者の価値観の多様化や地域の間人関係の希薄さが、学校と保護者との信頼関係を結びにくい状況にある。地域で孤立している家庭は、学校に対して批判的な面もある。
- ・保護者はいろんな問題を抱えており、問題を抱えた方々が子どもを一生懸命育てているということに、多くの方が関わっていくことが大事である。
- ・子育て講演会も悪くはないが、若い保護者に自分から相談に行くという感覚は少ない。ケース会議をしなければいけない段階の人たち、重い状況にある人には別の手だてが必要である。
- ・保護者もできていないところだけを指摘されると、精神的にしんどくなる。本人は分かっているが、そうはいかない事情があるのではないかと。そういう人が思わず出てきてしまうような何か仕掛けが必要である。
- ・研修に自分から参加する保護者には特別な支援はいらない。そうでないところに「少し子どもの方へ目を向けてね」とか、「あなたのしんどいことを受け止めるよ」ということがないとなかなか子どもに目が向かない。
- ・生きるか死ぬかという程のしんどさを持っているときに、「あれをしろ」と言われたら、辛いものがある。特に精神的な問題も増えてきており、怠惰でできていないのではなく、病気でできていない家庭が目立つ。親も傷ついていて、できているところを認めていく必要がある。
- ・どこが課題かしっかり見ることは大事であるが、それをどう伝えていくかも大事なことである。
- ・何が課題かしっかり見て、この家庭ならどこまで話をしてよいかが大変である。家庭支援は家庭を叱責するのではなく、エンパワメントできるように支援し、参加して良かったというようになってもらうことである。

○【学校について】

- ・学校自体も制度疲労をしている現実がある。行政も地域と学校・家庭といった形になるとみんな行政の縦割りのすき間の課題がある。コーディネーターなどの力強い方々が出てきて、線となり面となって、みんながそのエネルギーを結集していく必要がある。
- ・学校の中では学力の二極化、経済力＝学力という形になっており、学校は二極化した保護者への対応に困り果てている。その現実を地域と一緒に克服する学校づくりが必要である。
- ・学校は確認主義であり、子どもの様子から家庭の状況なども早く察知できる。イニシアティブは学校が持ったらどうか。行政が形の上でしくみを作るといつか壊れる。
- ・教師自身が社会を正しく認識できているかが重要である。地域全体で学校と一緒に子どもを育てていこうという風土に繋げることが大切である。
- ・一人ではなかなか元気になれずに萎えていってしまうが、マンパワーを活かす学校の体制、在り方が必要である。

○【地域について】

- ・地域にお願いする関係でなく、地域と一緒にやる関係が重要である。地域が、同じ目の高さで、自分たちも地域の子どもの育てるという意識で、学校と一緒に取り組んでいくという発

想が、学校支援地域本部事業を実施していても、まだまだ高められていない現実がある。

- ・ NPO活動は貴重であるが、NPOを地域で生かす全体像やビジョンがない。そのビジョンを、どこがどう持つのが経営の手腕である。
- ・ 地域と連携する学校の取組により、荒れていた中学校が落ち着きを取り戻してきている。しんどい層の子どもたちを地域と学校で支え、全体の学力を伸ばそうという発想が必要である。
- ・ 例えば、就学前の親子を対象に、大型ショッピングセンターのコミュニティルームを借り、そこを運営している企業とNPOと近くにある大学（学生）と協働して、未就学（3歳まで）を対象にした「つどいの広場事業」を開催している。リピーターの姿を見ながら、気になる親は専門家につなぐという支援をしている。
- ・ これからまちづくり協議会で、事業消化型ではなく、人と人がつながれる協議会にしていくことが大切である。

○【行政について】

- ・ 福祉と連携するという部分では、各市町には地域福祉計画があり、その中で子どもを地域でどう育てるかがポイントである。
- ・ いろんな層の子どもや親をキャッチできるシステムをどこでつくるかが明らかにされていない。
- ・ 教育委員会と市町部局との横のつながりがない。
- ・ 行政が、学校とコーディネーターのコーディネートを行う等の条件整備が大事である。コーディネーターがどういう取組をしているかを教師が知ること、地域に知らせていくことから始まる。
- ・ 県教委は何をするのか、市教委はどうするのかを整理していかなければならない。

○【コーディネーターについて】

（コーディネーターの構成について）

- ・ コーディネーターには様々な立場の人がなっている。例えば、民生委員、補導委員、PTA役員、元教員などがおり、それぞれの立ち位置で活動をしている。
- ・ 民生委員・主任児童委員が学校と接点を持つことは、地域の児童や保護者と顔見知りになれ、またトラブルを抱えた家庭があった場合は、学校と連携して早い対応ができる
- ・ 民生委員、教員出身などの強みがあり、その強みをうまく生かさせていけるように、システムができると良い。強みを生かせるコーディネーターが多いほどよい。

（コーディネーターの活用に関わって）

- ・ コーディネーターは子どもにとって親にとって評価しない人、一番受け入れやすい存在である。
- ・ コーディネーターが時間やお金抜きにして保護者の相談相手になって、しんどい家庭に関わり、学校が知り得ない内容などを聞いていてくれるケースがある。
- ・ 子どもが「おばちゃん、おばちゃん」と家で話しているうちに、ずっと子どもと一緒に家庭に関わるケースがある。
- ・ コーディネーターの良さは、近くにいる、すぐに相談でき、身近で使いやすいけれど、誰の味方かという部分がある。
- ・ つなぐ人がころころ代わらない方がよい。自分の子どもが卒業したから自分も卒業ではなく、そこに居続けてくれる人が必要である。
- ・ 次の年は、その人プラス何人かのように広がっていくと、裾野が広がるように思う。頑張ろうという気持ちに火がついたら良い。
- ・ コーディネーターは何をするのか。横文字で中身が見えないところがある。自分が何かをしないといけないというように、まじめな方ほど悩んでしまう。

（行政で考えていきたい課題）

- ・ コーディネーターの存在がこれからは必要になっていくと思うが、その役割等を行政内でしっかりと整理することが大切である。

- ・行政内でコーディネーターを活かすシステムを整備することが必要である。
- ・コーディネーターの活動内容について、年間計画や活動の道筋をはっきりと出していくべきである。
- ・ケース会議をする専門分野のレベルと声を聞くだけのレベルを分ける必要がある。福祉や精神的ケアのケースまで受け止めることはできない。活動範囲を整理することにより、安心して自分の強みを出せる。

(学校と考えていきたい課題)

- ・学校の中でコーディネーターが相談できる相手を明確にすることが大事である。学校によって格差がある。必ず、意図的にチームを組んでおくことも大事である。
- ・仕掛けづくりを、コーディネーターの孤軍奮闘ではなくて、学校と連携して教員の思いが出てくるような関係性が必要である。

(コーディネーター研修について)

- ・コーディネーター同士が集まって情報交換をし、元気を得てまた学校へ戻るようにしている。コーディネーターは情報交換会を求めている。
- ・時にコーディネーターと教頭との合同研修をするのも良い。
- ・コーディネーターに何でもお任せになるとしんどさがある。その方しかないというやり方は厳しい。もう一方でしんどさをバックアップする必要がある。
- ・必ず仲間づくりをしておくことが、コーディネーターの出発点である。

○【地域に根ざした家庭教育支援について】

- ・地域でしんどい人たちと関わり、頼れる人たちが増えていき、人は変わっても地域の中でいつまでも話ができる存在がいることが大切であり、そういう方々が地域のコンビニのように出てくることが、今の取組の値打ちである。
- ・事業の終了を見据えて、卒業制度を作り、地域に貢献してもらおう約束をして活動してもらおうという組織の作り方が必要である。コーディネーターとして勉強しながら、地域に巣立っていくという発想をすることで、地域に寄り添う理解者が増えていくのではないか。
- ・頼れる人たちがコンビニのように地域の中で存在することが、地域の関係性、人と人との関係性を作り替え、何を大事にする町なのかという雰囲気を作っていくことに結果としてなる。その時に、苦しんでいた保護者が自分の気持ちを語れるようになる。長い期間を見通しながら、こつこつと積み上げることが大切である。
- ・コンビニとは、コンビニを組める場所とも言える。どこにも行きようのなくなった人を地域や民間で相談を受けることも一つのコンビニである。そういう人が増えていくことをどう仕組んでいくかが重要である。